文部科学大臣賞

長傘にこめられたもの

静岡県 静岡市立城内中学校二年 増田 好美

持参することになる。が入っている。なので曇の日と雨の日は長傘と二本が入っている。なので曇の日でもバッグに折り畳み傘私の母は雨女で晴天の日でもバッグに折り畳み傘

誰に貸しても必ず戻ってくるからだ。 この長傘、私は「ホラーの長傘」と呼んでいた。

呑気に笑っている。それを母は「おかえりー」とでされて帰ってくる。それを母は「おかえりー」と添えられたお菓子と共に戻ってきた。時には修理ま以前も旅行先で知らない人に貸し、お礼の手紙が

「大丈夫だから。」いてきた。通り過ぎざまに母はすかさず声をかけ、で土砂降りになった。その時一人の女性が前から歩先日、一緒に出かけた時、天気予報が外れて一瞬

子で、と使っていた長傘を渡した。女性は急いでいる様

「すみません。|

した。あんな失礼な人に貸さなくてもいいのに、とムッとあんな失礼な人に貸さなくてもいいのに、とムッととだけ言って足早に去っていった。私はその態度に

「良かったねぇ、間にあっ事などが詳細に書かれてい ゃんの写真。手紙には「初孫が産まれました。 あの日娘さんの急な出産に立ち合う為、 た!大きなぶどうと一緒に添えられて そのことをすっ 傘を貸して下さりあ かり忘れて 間にあって。」 1) た。母は写真を見ながら、 がとうござい いた半月後、 いたの 急いでいた ました」。 は赤ち ってき あの

と言った。私も、

「うん。」

ずかしかった。と言ったけど一瞬でもその人を悪く思った自分が恥

「なぜ傘は戻ってくるのか。」私は初めて傘について聞いた。

「なぜ他人にお気に入りの傘を貸すのか。」

ことだと話してくれた。つて曽祖母に親切にしてくれた女の子を見習ってのに住所と名前が刻印されていたそう。貸す理由はか傘は曽祖母が母に贈った物で、もらった時には柄

駅で雨宿りをしていた曽祖母に「どこまで行きまなれられないと母は言う。
私は心臓がドキッとした。ホラーなんかじゃない。
を話したそうだ。女の子は「きっとお孫さんも私とを話したそうだ。女の子は「きっとお孫さんも私と言う。「あなたにできる?」と嬉しそうに言ったその声を忘れられないと母は言う。

だったことを知った。の想いから始まった、十五才の優しさがつまった傘三十年前、曽祖母が受けた恩を自分が返そうと感謝私は心臓がドキッとした。ホラーなんかじゃない。

そして、私が困った時、いつも誰かが助けてくれうか?届いているといいなと思う。女の子への恩は巡り巡って彼女に届いているだろ

たまらない気持ちになった。るのはそういうことだったのか、と分かった瞬間、そして、私が困った時、いつも誰かが助けてくれ

「情けは人の為ならず」

から。優しさの連鎖はいつまでも続くのだと感じたう。優しさの連鎖はいつまでも続くのだと感じた私も困っている人がいたら手をさしのべたいと思

らう。からきっとまたどこかで誰かの役に立っているのだからきっとまたどこかで誰かの役に立っているのだ昨日から、あの長傘が玄関に無い。夕立が降った

